

ふじのみや探検

ふもと 麓金山のひみつ 第22号

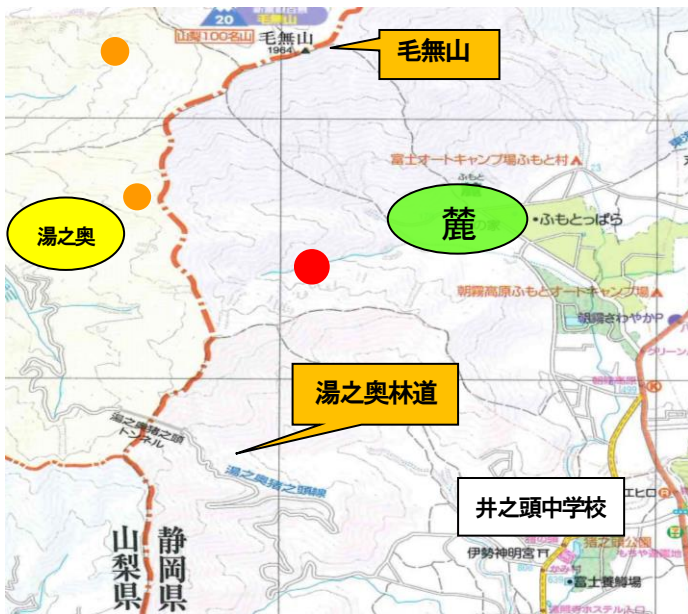


発行：富士宮市立中央図書館 〒418-0067 静岡県富士宮市宮町13-1 TEL:0544-26-5062 FAX:0544-26-1284

ひみつ1 麓金山はどこにあったの？

朝霧高原の西、毛無山の南に麓という地名があります。この麓から峠を越えて山梨県身延町下部に通じる一帯は、戦国時代から近世初頭にかけて、金の採掘がおこなわれていました。金山は山の中腹にあり、下図の赤いところです。

また、富士金山ともいわれ金鉢は山梨県の湯之奥に通じていました。



● の印は、湯之奥金山遺跡の位置

身延町には、湯之奥金山と総称される、中山・内山・茅小屋の3金山のほかにかわじり・常葉・柝代の3金山、合わせて6つの金山遺跡があります。

◇ことばの説明

金鉢…金をふくんだ岩石がでる場所。
坑道…金などの金属をふくんだ岩石をほるための穴。

ひみつ2 48万両の金！

「史話と伝説」には、「麓金山は明応年間に甲斐の武田氏の時代、これを採掘精錬して延棒につくり、24万両は軍資金として甲府の金蔵に納め、別に24万両は流通用とした」と、あります。

48万両の金というのは、どれくらいの金の重さや大きさでしょうか。両は重さの単位で、1両は37.7994グラムですが、武田信玄の時代の1両は約15グラムほどだと考えられます。48万両は7200キログラムの重さです。

縦20cm 横10cm 高さ6cmの金塊は約15.9キログラムです。この金塊約453本分が7200キログラムになります。麓金山からたくさんの金がほられていたのですね。



縦 20 cm
横 10 cm
高さ 6 cmの金塊

◇ことばの説明

明応年間…1492年から1501年までの期間。
採掘…岩石・土砂や地中の鉱物などを掘り出すこと。
精錬…不純物の多い金属から純度の高い金属を取り出すこと。

ひみつ3

麓金山はいつごろはじまったの？

富士金山江上荷
物五駄毎月六度
縦甲州境目雖有
相留儀金山之者
共為摠忍分不可有
相逢若自余之者
於通之者堅可加
成敗者也仍件
天文貳拾 辛亥
八月二日
大田掃部丞とのへ

この古文書は、1551年、今川義元が大田掃部丞とい
う人にあてた手紙です。内容は、「富士金山=麓金山で、
働く人々のために、毎月6回に限って馬5頭で荷物を
運ぶことを許す。それ以外のものは、甲駿の国境で
もあるから、通行すると必ず成敗する」ということが
書かれています。

この中にある「毎月6回馬5頭の荷物」というのは、
140人分の生活を支えることができるもので、麓金山が
大きな金山であったことを示しています。金鉱石を掘
る人、それを運ぶ人、くだいて粉にする人、砂金を取
り出す人、砂金をとくして純金にする人、また食事や
日常生活の世話をする人がくらししていました。近く
には沢があり、生活用水をはじめ、水を使って砂金を洗
っていました。盛んな時には、麓千軒とよばれ、おお
ぜいの人が金山にかかわっていました。

今川氏から武田氏、そして徳川家康が天下を統一す
ると、その家臣大久保長安の指揮によって、麓金山で
は金がたくさん採掘されましたが、しだいに金がとれな
くなります。さらには、元禄15年に山がくずれて金を
掘る場所がうまってしまいました。そこで閉山するこ
とになりました。

金山奉行として働いていた竹川氏は、江戸幕府から
御林守としての役目を受け、明治の初めまで務めまし
た。そして、現在も子孫の人が竹川家を守っています。

◇ことばの説明

甲駿…甲州と駿河。今の山梨県と静岡県。

大久保長安…武田の家臣で、甲州の金山開発を手がけ
た。その後、徳川の家臣として佐渡金山や麓金山の運
営にあたった。

御林守…富士山のふもとにある森林の管理をする江
戸幕府の役の名前。

ひみつ4

甲州金は 江戸時代の貨幣制度の もとになった

金は、神話の時代から高貴なものであり、うすくの
ばして仏像にはりつけたり、神仏をまつための用具
に使ったりするための貴重な材料でした。

戦国時代になると、織田信長などの大名たちは、
戦に勝つために鉄砲や弾薬などをきそってそろえま
した。その軍資金として金や銀が必要だったのです。

そのころは貨幣として銅銭が使われていましたが、
高額な鉄砲の取引には、ねうちのある金や銀が使われ
るようになりました。金や銀は、貨幣として重要な
役割をもつようになってきました。

特に武田信玄は、金の採掘に力を入れ甲州金と呼
ばれる金貨を作り、通貨として使ったり、褒美として
家臣に与えたりしました。

やがて、信玄のつくった甲州金は、両・分・朱・糸目
などの単位でさまざまな種類の貨幣となり、武田氏の
支配領域が広がると甲州だけでなく他の国でも使われ
るようになりました。

甲州金は、金額に見合うように、金の重さを正確に
計り、通貨として信頼できるようにしました。これは、
日本で初めてのことであり、江戸時代の貨幣制度のも
とになりました。



1両判(金1両は4匁)



1分判(1両の四分の一)



1朱判(1分の四分の一)



糸目判(1朱の四分の一)

◇ことばの説明

貨幣…商品ととりかえるねうちのあるもの。お金。

通貨…その国でつかわれているお金。貨幣であっても、
使われていなければ通貨ではありません。

匁…尺貫法による重さの単位。1匁は3.75グラム。

ひみつ5

どのようにして金をとったの？

金山資料館などで、「砂金とり」をしたことがあるでしょうか。水中で砂の中にまじる小さな金の粒をさがす遊びです。水中にキラキラ光る粒が砂金です。これは、金のでる山の沢で、砂金をさがす方法です。

金は、地下のマグマが地表に出てくるときにつくられたそうです。ですから、金のついでている岩石は帯状につながっています。これを金脈といいます。地表に出ている金のついでている岩石は風雨にさらされ、やがてくずれ、沢に流れ込みます。さらに、岩は互いにぶつかり合い、水にけずられ小さくなります。金のまじった岩石もくだかれ、金だけがかんたんに見つけることができるようになります。これが砂金です。

金脈を専門に見つける人を山師といいます。山師は沢に入り砂金を見つけ、その金脈をつきとめます。砂金をてがかりに金脈をさがすのです。

その後、金山衆とよばれる金を専門に採掘する集団が力をあわせて仕事をしました。金脈をもとめて坑道を掘り、金鉱石を取り出しました。さらに、掘った金鉱石を熱してくだき、石臼でひいて粉のようにしてから水にさらし、砂金として取り出しました。金鉱石からとった砂金は不純物が多く、精錬して純度の高い金塊にしました。



◇ことばの説明

マグマ…地下のふかいところで、高温のためにどろどろにとけている物質。

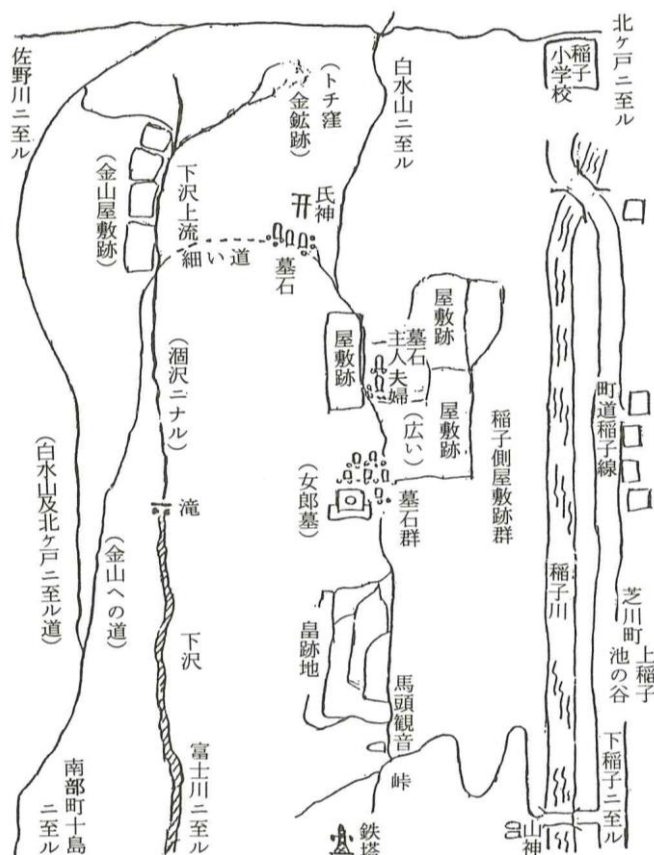
ひみつ6

稲子や楠金にも金はでた！？

富士宮市の稲子や長貫の楠金には、昔、金がでたという話が伝わっています。山梨県十島に、昭和20年ころまで、金山があったことを考えると、十島に近い稲子に金がでて不思議ではありません。金脈はつながっているかもしれません。

郷土史家の調査によると、稲子から十島に行く途中の下沢の上流にトチ窪金鉱遺跡があり、その近くに金山で働いた人の屋敷跡や墓が見つかります。

また、芝川町誌「口碑と伝説」によると、楠金の窪尻というところで見つけた人がいて、穴を掘ってかなりの金を精錬したことや、金鉱を掘った場所に楠の大木があったので、楠金という地名がついたという話が伝わっています。

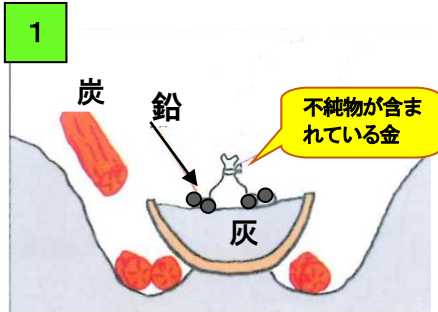


郷土史家の調査による稲子金山の場所

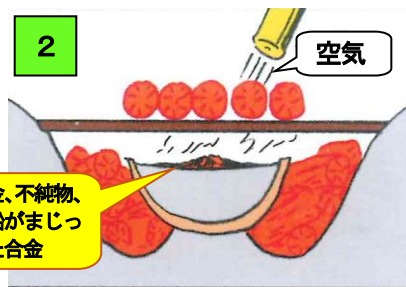
◇ことばの説明

口碑…昔からの言いつたえ。

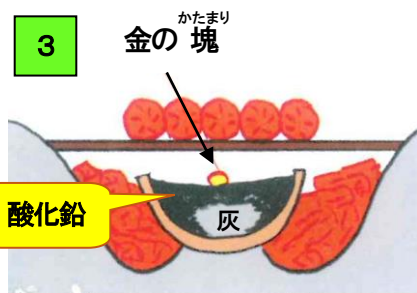
金鉱石から取り出した金は、金といっしょに銅・鉄・ヒ素・珪酸などの不純物がそのまま含まれています。戦国時代には、この不純物をとりのぞく灰吹法という技術が中国から伝わっていました。



不純物のまざった金と鉛を炭で熱すると、両方とも溶けてどろどろした合金になる。



溶けてどろどろになった合金に空気を吹きつける。鉛は空気中の酸素と結びつき酸化鉛になる。金に含まれていた不純物も酸素と結びつき酸化鉛にまざる。



酸化鉛は表面張力が小さいので灰の中にしみこんでいく。不純物のとれた金は表面張力が大きいので上に残る。

◇ことばの説明

表面張力…表面をできるだけ小さくしようとする性質のこと。

合金…2種以上の金属をまぜた材料。



◇『第22号 麓金山のひみつ』は、次の資料をもとに作りました。

- 1 郷土史『駿河』第34,35号 「麓金山と富士山御林守」 山口 稔 1981
- 2 郷土史『駿河』第15号 麓金山小史 入江 芳之助 1970
- 3 『武田軍団を支えた甲州金・湯之奥金山』 谷口一夫 / 新泉社 2007
- 4 『湯之奥金山遺跡の研究』 湯之奥金山遺跡学術調査団 / (株)エンドレス 1992
- 5 『史話と伝説』 松尾四郎編集 / 松尾書店 1958
- 6 『お金でさぐる日本史Ⅱ』 板倉聖宣監修 著者 松崎重広 画家 原島サブロー / 国土社 1993
- 7 『戦国時代の道具図鑑』 本山賢司 / PHP 研究所 2003
- 8 『図録 日本の貨幣 I 原始・古代・中世』 日本銀行調査局 / 東洋経済新報社 1972
- 9 郷土史『かわのり』第14号 「稲子金山と女郎墓」1987
- 10 『写真記録 日本貨幣氏』 写真記録刊行会 / 日本ブックエース 2012